

聖書：使徒の働き 7章 30～53節

説教：神はどこにおられるのか

1 ステパノ起訴される

1) 原告：訴えた人たち

二千年前のエルサレムには、地元にならなくてヘブル語を話す人たちと、同じユダヤ人ですが外国から戻ってきてギリシャ語しか話せない人たち、この二つのグループが住んでいました。教会にはこの両方の人たちがやって来ます。想像されるとおりにどうしてもコミュニケーションの難しさが生じてしまいます。小さな集まりのうちは何とかなっていましたが、でも、人が増えていくとギリシャ語を使うユダヤ人のやもめに食事の届かないというトラブルが起きてしまいました。

すぐに対策会議が開かれ、その結果、食事配給部門を新たに組織し、そのリーダーにステパノを任命します。ステパノは早速ギリシャ語を使う人たちが住む地域に通い問題の解決にあたります。そこには、ユダヤ教を信じている人たちが大勢います。ステパノが毎日通ってきて、キリストという男の話をするのが気に入りません。難しい質問をふっかけて追い出そうとしたのですが、ステパノがきちんと答えてまったく動じない。かえってこちらがやり込められる形になりました。こうなるとますます腹が立つ。とうとう、にせの証言者を立てて裁判所に訴えてしまいます。

2) 起訴理由1：神に逆らっている

訴えた理由は二つあります。

一つ目は6章13節。「この人は、聖なる所

と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。」聖なる所とは、あとで見ますが神殿を指していることは明らかです。ステパノを訴えたギリシャ語をしゃべるユダヤ人たちはもちろん、裁判官として席に着いている大祭司たちも、神殿には神が臨在していると信じていますから、これはもうステパノは神に逆らっていると言われていたのと同じです。もし本当にそうなら、訴えられる十分な理由になります。

3) 起訴理由2：神殿をこわそうとしている

起訴理由の二つ目は14節にあります。

『あのナザレ人イエスはこの聖なる所をこわし、モーセが私たちに伝えた慣例を変えてしまう』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」今風に言い直しますと、「ステパノは、ナザレ人イエスが神殿をこわすと、さかんに言いふらし、民衆を迷わせる、危険なテロリストである。」これが彼らの言い分です。

火のない所には煙は立たないと言われます。確かにそれらしいことをイエスは言われました。ヨハネ2章19節。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」ステパノは、イエスのこのことばをそのまま人々に語っていたのでしょう。ユダヤ人たちはこれを聞き、危険な思想であると言って訴えたわけです。

でも、イエスは本当に建物を壊せと言ったのでしょうか。続くヨハネ2章21節にこうあります。「しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。」建物の

神殿を壊せと言ったのではなかったのです。でもユダヤ人たちはそれが理解できない。建物の神殿を壊せと言っていると思いついで、ステパノを訴えました。つまりこの裁判は、いったい何を争う裁判であったか。神殿とは何かを争う裁判であったか。神殿は建物のことなのか、それとも別のものなのか。そのことが争われている裁判と言うこともできます。

2 ステパノの弁明

1) 父祖たちは何をしたのか

これらの訴えに対するステパノの弁明が7章全体にわたります。先週は37節まで見てきて、今日はその続き、後半部分を見ていきます。とは言っても、いったいステパノは何を言いたいのか、ヒントがなければわかりにくいと思います。そんなとき、いつも言います。「繰り返されていることばに注意なさい。」それはなにか。「私たちの父祖たち」あるいは「あなたがたの父祖たち」に注目します。

まず38, 39節。「また、この人が、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの父祖たちとともに、荒野の集会において、生けるみことばを授かり、あなたがたに与えたのです。ところが、私たちの父祖たちは彼に従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトをなつかしく思った。」

私たちの父祖たちは何をしたか。モーセが神の行けるみことばを授かって語る者であると一旦は認めました。しかしなにか苦しいことがあるとすぐにモーセから離れ、自分たちの神を造って拝み始めた。その結果、42節にあります。アモス書に書かれているとおりにバビロンに捕らえ移されてしまいました。

父祖たちはこのようにして神に逆らいました。ステパノはまずこのことを強調します。これが何を意味するのかはまた後で触れるでしょう。

2) 神はどこにおられるのか (イザヤ書 66章1, 2節前半)

続いて44節。「私たちの父祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりに、造られていました。」

モーセを通して神は幕屋をイスラエルの民に与えました。イスラエルはこれを大切に守り、後にはソロモンがすばらしい神殿を建てます。こうして見ると、イスラエルの民は幕屋や神殿を守り通すことにかけては、実に見事な働きぶりであったとすることができます。使徒の働きの時代もその熱心さは変わりません。ステパノを訴えたのも、その熱心さから来ています。しかしステパノは48節以降でこう言うのです。

「しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。『主は言われる。天はわたしの王座、地はわたしの足の足台である。あなたがたは、どのような家をわたしのために建てようとするのか。わたしの休む所とは、どこか。わたしの手が、これらのものをみな、造ったのではないか。』」

これはイザヤ書66章1節と2節前半からの引用です。皆さんこれをどう思われるでしょうか。モーセは幕屋をつくりなさいと言われました。人々は幕屋をかついでヨルダン川をわたり、約束の地に進んできました。ダビデは幕屋では申し訳ない。神殿を建てるべきではないかと考え、その計画をソロモンに

託しました。ところが、その神殿が建てられた後で、今度はイザヤの口を通し、神は人の手で造ったものには住まないとはっきりと言われたのです。矛盾しているようで、とまどいます。でも聖書は神のみ言葉です。すべてが美しく調和しているはずで、でもどうすれば、この二つの事がうまく調和するのでしょうか。

3)あなたがたは父祖たちと同じように神に逆らっている

ユダヤ人たちは建物の神殿を神の御臨在の場所として信じ、神殿を守ることに一生懸命でした。それが神に従うことであると信じています。しかし、本当に彼らは神に従っていたのでしょうか。イエスが、「この神殿をこわしてみなさい」と聞いたとき、その本当の意味を理解できませんでした。イエスのなさること、語ることにいちいち腹を立て、結局そのナザレ人イエスを十字架にかけ、そこで苦しまれるイエスを見て、満足しました。

でもモーセはなんと saying いたか。37 節です。「神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。」

もし、これがナザレ人イエスを指しているのであったならどうなるのでしょうか。父祖たちがやったことと同じことをしたことになります。いや、したのです。結局、あなたがたも神から遣わされてきた預言者を殺し、神に逆らっているのだ。これがステパノの言おうとしていたことの一つ目です。

この裁判では、神殿とは何か争われていると言いました。言い換えれば、神はどこに住まわれるのかが争われていると言ってもよい。ユダヤ人は建物の神殿にこそ神はおら

れると思込んでいます。しかし、イザヤは、まったく別のことを言いました。神は建物としての神殿に住むのではない。ところがユダヤ人たちは理解しなかった。それで真の神殿となられたイエス・キリストを殺し、ステパノは神殿をこわそうとしていると訴えました。実は話は逆で、神殿を破壊したのはあなたがたがたユダヤ人のほうだった。それがステパノの言おうとしたことの一つ目でした。

3 心砕かれた者とともに

でも、ステパノは、なぜこのような強い調子で言うのでしょうか。ステパノは、自分は神に従っていると思っていたのでしょうか。イエスを十字架につけていない、自分は無罪であると思っていたのでしょうか。いいえ、反対です。自分こそ神に逆らい、この手でイエスを十字架につけた罪人であると心から認めているから言うのです。認めた者に神がどれほど恵み豊かな方であるかを知っているから言うのです。その恵みを知って欲しいから語るのです。

本当でしょうか。やっぱり、自分を迫害する者たちへの怒りと憎しみからこんなことを言っているのではないか。そんなふうに疑うかもしれません。でも 60 節にこうあります。

『主よ。この罪を彼に負わせないでください。』こう言って、眠りについた。」

彼は怒りではなく、恵みを伝えようとしていました。どんな恵みでしょうか。イザヤ書 66 章 2 節の後半にこう書かれています。「わたしが目を留めるものは、へりくだって心砕かれ、わたしの言葉におののくものだ。」

あなた神に逆らった者であると言われ、そのことばの前にもしおののくことができたなら、神は目を留めてくださると言うのです。

恵みを注いでくださると言うのです。神がとも
もにいてくださると言うのです。

神はどこにおられるのでしょうか。教会の
建物におられるわけではありません。悲しむ者
とともにおられます。取り返しのつかないこ
とをしてしまったと後悔する者、心の中で人
を憎み、殺し、人のものをねたみ、さげすみ、
愛することができず、かえって傷つけてしま
うと認める者、失敗をし、弱くなり、恥をか
いている者、飢えている者、この世からさげ
すまれている者とともにおられます。神に逆
らい、イエス・キリストを十字架にかけて殺
した者である。そのことを悲しみながら認め
る者とともにおられます。